

Title	「黒人の女」：ナンシー・モレホンの5篇の詩
Sub Title	"MUJER NEGRA" : Cinco obras poéticas de Nancy Morejón
Author	工藤, 多香子(Kudo, Takako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.48 (2016.) ,p.91- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20161231-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【翻訳】

「黒人の女」

——ナンシー・モレホンの5篇の詩——

(訳・解説 工藤多香子)

現代キューバを代表する詩人のひとりであるナンシー・モレホン (Nancy Morejón) は、1944年に首都ハバナ市で生まれた。1962年に処女詩集 *Mutismo* (『無言』) を出版して詩人としてデビューして以来、数多くの詩集を発表し、2001年にはキューバ国民文学賞を受賞している。彼女の作品はすでに英語、フランス語、ドイツ語などに翻訳されており、2006年にはマケドニア共和国で毎年開催される「ストルガ詩の夕べ」で金冠賞を受賞した。

キューバ国民文学賞の受賞に際し、彼女は次のように語っている。

ずっとわたしは、沈黙させられた声の合唱にことばを与えようとしてきました。その声は、起源や人種や性別を飛び越えて、歴史を通してわたしの言語で甦るのです。(中略) バイオリンと弓のあいだの場所を探し求めて、そしてまた、わたしたちを略奪の哲学に情け容赦なく従わせた過去における最上のものと、最良の定義を求めても踏みにじられるアイデンティティと、この二つのあいだの均衡を探し求めて、わたしの声は流れ出ました [Morejón 2002]。

別の論考でモレホン自身が認めているように、彼女が「黒人」であること、女性であることは、彼女の詩作に決定的に重要な意味をもつ [Morejón 1996:7]。また、自分の詩には本質として「アフリカ性 (africanía)」があるとも彼女は言う [Cordones-Cook 1996:67]。しかしこの「アフリカ」ということばは、アフリカ大陸やそこに住む人々とすぐに結びつくのではない。それは、たとえば彼女の次のようなことばに表現されている。

自分がどこから来たのかを知りたいと思ってきた。でもそれはできなかった。他の多

くのアフリカ人の子孫と同じく、わたしには家系図を描くことができない。

[Cordones-Cook 1996:66]

彼女の先祖は、強制的に大西洋を渡らされ、キューバに連れてこられた黒人奴隷である。彼女は自分のルーツを探求しようと試みるが、見いだせるのは力づくで根を断ち切られた過去でしかない。彼女のルーツは失われたままで、具体的なアフリカの土地とも人ともけってつながってはいない。もちろんこの暴力的な経験は彼女ひとりのものではない。モレホンが詩のなかで甦らせようとしている「沈黙させられた声」とは、なによりもまずアフリカから強制的に連れてこられ、奴隷としてキューバで働かされたという経験を共有する「黒人」の声であり、彼らの集合的な記憶である。それもとりわけ女性たち——「抑圧者が食事するテーブルにかける布に刺繍させられた女性たち」[Morejón 2002]——の声なのだ。また、彼女が「黒人」ということばを使うとき、それは生物学的な事実としてではなく、このような同じ経験を共有する、歴史的事実としての「人種」をさしている[Cordones-Cook 1996:66]。

ここに訳出するのは、モレホンの詩5篇である。いずれも、歴史のなかに埋もれた「黒人」たち、女性たちの声を甦らせようという、彼女の詩の特徴をもっともよく表現する代表作である。以下、5篇の詩についてごく簡単な解説を加えておく。また、詩のなかに登場する、説明が必要な語句については文末に訳注をつけている。

「母」[初出：*Piedra Pulida* (『磨いた石』), La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1986, p.72.]

モレホンは自作の詩の朗読会を必ずこの詩から開始する。彼女の母アンヘリカ・エルナンデスは、裁縫師であり、主婦であり、そして孤児だった。モレホンにとって母親は、きりつめた生活のなかで自分を育て、教育し、そして何よりも独立心を植え付けてくれた存在だった [Morejón 1996:7]。この詩のなかで描かれる「母」は、アンヘリカ個人であると同時に、貧しさと孤独のなかでも、屹然と前を向いて生きてきたすべての女性、とりわけ「黒人」の女性たちでもある。

「わたしはご主人さまを愛している」[初出：*Octubre imprescindible* (『不可欠な十月』), La Habana: Ediciones Unión, 1982, pp.45-47.]

原題は *Amo a mi amo* である。スペイン語では「わたしは愛する」, 「ご主人」はどちら

「黒人の女」

も *amo* となり、それが繰り返されることで詩に独特のリズムを与えている。拙訳ではこのリズム感をとらえきれていないのは、翻訳者の力量不足ゆえである。また、「舌」と訳出した *lengua* には「言語」の意味もあり、ここではその二重の意味がうまく使われている。主人の愛人としてただ従属していたひとりの奴隷が、自我に目覚め、反乱するまでを描くこの詩は、もっともよく知られたモレホンの詩のひとつである。

「黒人の女」[初出：*Casa de las Américas*, No.88, 1975, pp.119–120.]

ある日、眠っていたモレホンは、窓の柵の向こうにひとりの黒人女性がいるのに気づいて目が覚めた。その女性が気になって、モレホンはどうしても眠れなかった。じっと見つめていたら、女はやがて消えてしまった。翌朝、目覚めてすぐにその女のことを思い出し、書いたのがこの詩である。モレホンはその黒人女性がこの詩を口述したと語っている [Morejón 1996:6–7]。

詩の終盤ではキューバ革命への共感が表現されているが、そこからモレホンを単にイデオロギイ的詩人とみなしてしまえば、彼女の詩を見誤ってしまうだろう。この詩に関して「あの女性の《わたし》は、70年代のキューバに生きるわたしの個人的経験と溶け合った叙事詩的な《わたしたち》なのだ」と、彼女が語っているように [Morejón 1996:7]、70年代キューバの、多くの知識人が「政治的」にならざるをえなかった状況においてこの詩が書かれたことは留意すべきであろう。

「ペルソナ」[初出：*La Quinta de los Molinos* (『キンタ・デ・ロス・モリーノス』), La Habana: Editorial Letras Cubanas, 2000, pp.34–36.]

詩中の「窓の柵の向こうで話している女」という一節は、先の「黒人の女」のエピソードを連想させる。2000年に発表されたこの詩が、1975年の「黒人の女」と連続する主題をもっていることは明らかだろう。しかし、後者では黒人女性の集合的記憶が想起されているのに対し、前者では「黒人の女」である「わたし」は何者なのかという問いに焦点があたっている。

「世界たち」[初出：*Piedra Pulida* (『磨いた石』), La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1986, p.106–108]

原題が *Mundos* と複数形になっているように、この詩では二つの世界、二つの文化を自分の居場所としていこうという決意が表明されている。暴力的にアフリカ文化のルーツを

断ち切られた歴史的事実を冷静にみつめながらも、モレホンはそのルーツの回復をめざすのではない。スペイン語、スペインの文化もまた彼女の存在の切り離しがたい一部なのだ。スペイン語を母語とし、そのことばで詩作する「黒人」であるモレホンの、アイデンティティをめぐる考え方がよく反映された詩である。

母

母は庭を持てなかった。
手に入れたのは、太陽のもと
繊細な珊瑚礁に浮かぶ
切り立った島々。
母の瞳に映ったのは
穢れない枝ではなくたくさんの棍棒。
なんという時代だったことか。
孤児院のモルタルを裸足で駆け
笑うことを知らず
水平線を見ることすらできなかった。
母は象牙の部屋を持てなかった。
籐細工の居間も
熱帯の静かなステンドグラスも。
母が手に入れたのは歌とハンカチ。
わたしの深い信念をやさしく揺るために、
敵の冷たい骸のまえで
黙殺された女王である母は頭をもたげ、
その宝石のような手を、わたしたちに委ねるために。

わたしはご主人さまを愛している
わたしはご主人さまを愛している。
わたしは彼の竈にくべる薪を集める。
わたしは彼の薄色の目を愛している。

MADRE

Mi madre no tuvo jardín
sino islas acantiladas
flotando, bajo el sol,
en sus corales delicados.
No hubo una rama limpia
en su pupila sino muchos garrotes.
Qué tiempo aquel cuando corría, descalza,
sobre la cal de los orfanatos
y no sabía reír
y no podía siquiera mirar el horizonte.
Ella no tuvo el aposento de marfil,
ni la sala de mimbre,
ni el vitral silencioso del trópico.
Mi madre tuvo el canto y el pañuelo
para acunar la fe de mis entrañas,
para alzar su cabeza de reina desoída
y dejarnos sus manos, como piedras preciosas,
frente a los restos fríos del enemigo.

AMO A MI AMO

Amo a mi amo.
Recojo leña para encender su fuego cotidiano.
Amo sus ojos claros.

子羊のように従順に
わたしはご主人さまの耳に蜜のしずくをかける。
わたしを草の寝台に横たえた手を
わたしは愛している——
ご主人さまは嘯み、そして支配する。
照りつける太陽、略奪を競う日々
膿と銃創だらけのからだをわたしは扇ぎ
彼は秘密の話をうち明ける。
海賊をはたらき、遠くの地をさまよった彼の足を
わたしは愛している。
ある朝タバコ畑を出たところでみつけた
きめの細かい粉で
彼の足をさする。
彼はビウエラをつま弾いた。そして彼の喉から詩が響き出た。
マンリケの喉から生まれたかのような詩が。

わたしはマリンプラの調べを聞いたかった。
わたしは彼の赤く薄い口を愛している。
そこから出てくる言葉は
わたしにはまだ
わからない。彼に差し出すわたしの舌はもう彼のものではない。

そして、粉々になった絹の時間。

古参の見張り番が話しているのを聞いてしまった。
わたしの愛する人が
製糖工場の大釜で鞭を振りおろしていることを。
それはまるで地獄のよう。いつも話してくれた
あの神さまの地獄のよう。
彼はわたしになんて言うだろう？
どうしてわたしはコウモリの理想の住処で暮らすのだろうか？

Mansa cual un cordero
esparzo gotas de miel por sus orejas.
Amo sus manos
que me depositaron sobre un lecho de hierbas:
Mi amo muerde y subyuga.
Me cuenta historias sigilosas mientras
abanico todo su cuerpo cundido de llagas y balazos,
de días de sol y guerra de rapiña.
Amo sus pies que piratearon y rodaron
por tierras ajenas.
Los froto con los polvos más finos
que encontré, una mañana,
saliendo de la vega.
Tañó la vihuela y de su garganta salían
coplas sonoras, como nacidas de la garganta de Manrique.

Yo quería haber oído una marímbula sonar.
Amo su boca roja, fina,
desde donde van saliendo palabras
que no alcanzo a descifrar
todavía. Mi lengua para él ya no es la suya.

Y la seda del tiempo hecha trizas.

Oyendo hablar a los viejos guardieros, supe
que mi amor
da latigazos en las calderas del ingenio,
como si fueran un infierno, el de aquel Señor Dios
de quien me hablaba sin cesar.
¿Qué me dirá?
¿Por qué vivo en la morada ideal para un murciélago?

なぜ彼に仕えるのだろうか？
わたしよりも幸せな馬たちが引く
豪華な馬車で彼はどこに行くのだろうか？
わたしの愛は農園の奴隷たちをおおう雑草のよう。
だれにも奪い取れない、ただひとつのわたしのもの。

わたしは呪う。

着せられたこのモスリンの服を
無慈悲に押しつけられたこの無意味なレース飾りを
ひまわりのない夕暮れの、わたしのこの雑用を
わたしには嘔みくだせない、ごたまぜの敵意をもつこの舌を
彼に乳を与えることすらできない、この石の乳房を
彼の古い鞭で切り裂かれたこの腹を
この呪われた心臓を。

わたしはご主人さまを愛している。でも毎晩
サトウキビ畑に向かう花盛りの小道を横切るとき
こっそり愛し合ったあの畑
ナイフを手に、罪のない牛かのように彼の皮を剥ぐ
わたしがいる。

太鼓が轟き、わたしにはもう聞こえない
彼の嘆き声も、うめき声も。
鐘がわたしを呼んでいる ...

黒人の女

横断させられた海の泡がまだ臭う。
わたしは夜を覚えていない。
海だって覚えていないだろう。

「黒人の女」

¿Por qué le sirvo?
¿Adónde va en su espléndido coche
tirado por caballos más felices que yo?
Mi amor es como la maleza que cubre la dotación,
única posesión inexpugnable mía.

Maldigo

esta bata de muselina que me ha impuesto;
estos encajes vanos que despiadado me endilgó;
estos quehaceres para mí en el atardecer sin girasoles;
esta lengua abigarradamente hostil que no mastico;
estos senos de piedra que no pueden siquiera amamantarlo;
este vientre rajado por su látigo inmemorial;
este maldito corazón.

Amo a mi amo pero todas las noches,
cuando atravieso la vereda florida hacia el cañaveral
donde a hurtadillas hemos hecho el amor,
me veo cuchillo en mano, desollándolo como a una res
sin culpa.

Ensordecadores toques de tambor ya no me dejan
oír ni sus quebrantos, ni sus quejas.
Las campanas me llaman...

MUJER NEGRA

Todavía huelo la espuma del mar que me hicieron atravesar.
La noche, no puedo recordarla.
Ni el mismo océano podría recordarla.

でも、遠くに見えた最初のカツオドリのことは忘れない。
雲は高く、まるで無邪気な目撃者。
わたしの失われた海岸も、わたしの祖先の言葉も、たぶん忘れてはいない。
わたしはここに置き去りにされ、ここで生きた。
そして、家畜のように働いたから
ここでわたしは生まれ変わった。
どれだけ多くのマンディングの英雄譚に縋ろうとしたことか。

わたしは反乱を起こした。

旦那様が広場でわたしを買った。
わたしは旦那様の上着に刺繍し、彼の息子を生んだ。
わたしの息子に名前はなかった。
そして、旦那様は完全無欠の英国貴族に殺された。

わたしは歩いた。

ここはわたしが逆さ吊りで鞭打たれた土地。
この土地のあらゆる川を漕いで下った。
この土地の太陽の下、種を撒き、刈り入れた。でも、収穫物を食べることはなかった。
奴隷小屋がわたしの家。
それを建てる石を運んだのはわたし。
地元の鳥の自然なリズムにあわせて歌いながら。

わたしは蜂起した。

まさにこの土地で、たくさんの人の生血と
腐った骨に触れた。
彼らもこの土地に連れてこられたのだろうか、わたしのように。
もはやギニアへの道を思うこともなかった。
ギニアだったろうか？ベナンか？マダガスカルか？それともカボベルデか？

「黒人の女」

Pero no olvido al primer alcatraz que divisé.
Altas, las nubes, como inocentes testigos presenciales.
Acaso no he olvidado ni mi costa perdida, ni mi lengua ancestral.
Me dejaron aquí y aquí he vivido.
Y porque trabajé como una bestia,
aquí volví a nacer.
A cuánta epopeya mandinga intenté recurrir.

Me rebelé.

Su Merced me compró en una plaza.
Bordé la casaca de Su Merced y un hijo macho le parí.
Mi hijo no tuvo nombre.
Y Su Merced murió a manos de un impecable *lord* inglés.

Anduve.

Ésta es la tierra donde padecí bocabajos y azotes.
Bogué a lo largo de todos sus ríos.
Bajo su sol sembré, recolecté y las cosechas no comí.
Por casa tuve un barracón.
Yo misma traje piedras para edificarlo,
pero canté al natural compás de los pájaros nacionales.

Me sublevé.

En esta misma tierra toqué la sangre húmeda
y los huesos podridos de muchos otros,
traídos a ella, o no, igual que yo.
Ya nunca más imaginé el camino a Guinea.
¿Era a Guinea? ¿A Benín? ¿Era a Madagascar? ¿O a Cabo Verde?

わたしはさらに働いた。

わたしの千年の歌とわたしの希望、その礎をしっかりと固めた。
ここにわたしの世界を築いた。

わたしは山を登った。

逃亡奴隷の砦がわたしの本当の独立となった。
そしてマセオの部隊で馬を馳せた。

ようやく一世紀が経ち、
青い山から
子孫らと共に、

わたしはシエラから下山した

資本家と高利貸しを終わらせるため、
将軍とブルジョアを終わらせるため。
今、わたしは存在している——わたしたちは今ようやく所有し、創造している。
わたしたちに無縁なものは何もない。
土地はわたしたちのもの。
海も空もわたしたちのもの。
魔法も空想もわたしたちのもの。
わたしの同胞たちよ、 Kommunismusのために植えた木のまわりで
あなたがたが踊っているのがここに見える。
その木はもう豊かに鳴り響いている。

ベルソナ

この女たちのどれがわたしなのだろう？

Trabajé mucho más.

Fundé mejor mi canto milenario y mi esperanza.

Aquí construí mi mundo.

Me fui al monte.

Mi real independencia fue el palenque
y cabalgué entre las tropas de Maceo.

Sólo un siglo más tarde,
junto a mis descendientes,
desde una azul montaña,

bajé de la Sierra

para acabar con capitales y usureros,
con generales y burgueses.

Ahora soy: sólo hoy tenemos y creamos.

Nada nos es ajeno.

Nuestra la tierra.

Nuestros el mar y el cielo.

Nuestras la magia y la quimera.

Iguales míos, aquí los veo bailar
alrededor del árbol que plantamos para el comunismo.

Su pródiga madera ya resuena.

PERSONA

¿Cuál de estas mujeres soy yo?

この数世紀の繁栄を見守ってきた
変哲のない窓の柵のうしろで
おしゃべりしている女がわたしではないかしら？
飛ぶように走り、
この世のものと思えぬ褐色の脚を
衛星のように巡回させて
天文学的記録を達成する
あの背の高い黒人の女がわたしだろうか。
彼女のどの筋肉にわたしの相貌は現れるだろう？
禁じられた雪の国から
輸入された十一音節詩のように、そこに据えられたわたしの顔。

わたしは窓辺にいて
「アントニオの女」が横切る。
形にもならない通りから、「向かいのお嬢さん」が横切る。
「お袋——黒人女のパウラ・バルデス——」が横切る。
彼女の着るもの、彼女の食べるもの、
そして歩くごとにふり撒くベチバーの匂い
買い与えるのはどこのお坊ちゃま？
この女の何がわたしの中に残っているだろう？
わたしたち二人を結びつけるのは何？わたしたちを分かつのは何？
それともわたしは「暁に彷徨う女」かしら？
捕獲され、
搾り取られ
キンタ・デ・ロス・モリーノスや
港の栈橋あたりで
転売され、そののち
舗道でのびているサギのように
ジャガーの夜にタクシーをつかまえる、彷徨う女かしら？
彼女たち——誰？わたしのこと？
こんなにもわたしに似ているこの女たちは誰？

¿O no soy yo la que está hablando
tras los barrotes de una ventana sin estilo
que da a la plenitud de todos estos siglos?
¿Acaso seré yo la mujer negra y alta
que corre y casi vuela
y alcanza *records* astronómicos,
con sus oscuras piernas celestiales
en su espiral de lunas?
¿En cuál músculo suyo se dibuja mi rostro,
clavado allí como un endecasílabo importado
de un país de nieve prohibida?

Estoy en la ventana
y cruza “la mujer de Antonio”;
“la vecinita de enfrente,” de una calle sin formas;
“la madre—negra Paula Valdés—.”
¿Quién es el señorito que sufraga
sus ropas y sus viandas
y los olores de vetiver ya desprendidos de su andar?
¿Qué permanece en mí de esa mujer?
¿Qué nos une a las dos? ¿Qué nos separa?
¿O seré yo la “vagabunda del alba,”
que alquila taxis en la noche de los jaguares
como una garza tendida en el pavimento
después de haber sido cazada
y esquilada
y revendida
por la Quinta de los Molinos
y los embarcaderos del puerto?
Ellas: ¿quiénes serán? ¿o soy yo misma?
¿Quiénes son éstas que se parecen tanto a mí

からだの色だけでなく
消えることのない奇妙な火で
烙印を押されたわたしたちの家畜の皮が発する
襲いかかるような湯気までが似ている。
どうしてわたしなの？ どうして彼女たちなの？

その女は誰？
たえず蘇る戦いののちに
無信心の祈りをつぶやきながら
あるいは賛歌を歌いながら
わたしたちみんなの中において、わたしたちみんなから逃げる、
自分の謎から逃げ、自分のはるかな起源から逃げる、その女。

わたしの骨はすべてわたしのものなのかしら？
わたしの骨は誰のもの？
ゴレ島の、あの遠い広場で
買ってくれたのだろうか？
わたしの肌はすべてわたしのもの？
それとも、別の水平線、別の存在、別の人間、別の神に
痕跡を残した腹をもつ
別の女の骨と肌を
かわりに返してくれたのかしら？

わたしは窓辺にいる。
誰かがいるのは知っている。
どこかの女がわたしの骨とわたしの肉を見せつけているのを知っている。
その女は擦り切れた自分の乳房にわたしを探し、
そして逆境で困り果てたわたしを見つけたのを知っている。
わたしたちの肌には夜が埋められている。
賢明な夜は彼女の骨とわたしの骨を作り直す。
空からやってきた一羽の鳥が、その光をわたしたちの目に変えた。

「黒人の女」

no sólo por los colores de sus cuerpos
sino por ese humo devastador
que exhala nuestra piel de res marcada
por un extraño fuego que no cesa?
¿Por qué soy yo? ¿Por qué son ellas?

¿Quién es esa mujer
que está en todas nosotras huyendo de nosotras,
huyendo de su enigma y de su largo origen
con una incrédula plegaria entre los labios
o con un himno cantado
después de una batalla siempre renacida?

Todos mis huesos, ¿serán míos?
¿de quién serán todos mis huesos?
¿Me los habrán comprado
en aquella plaza remota de Gorée?
¿Toda mi piel será la mía
o me han devuelto a cambio
los huesos y la piel de otra mujer
cuyo vientre ha marcado otro horizonte,
otro ser, otras criaturas, otro dios?

Estoy en la ventana.
Yo sé que hay alguien.
Yo sé que una mujer ostenta mis huesos y mi carne;
que me ha buscado en su gastado seno
y que me encuentra en la vicisitud y el extravío.
La noche está enterrada en nuestra piel.
La sabia noche recompone sus huesos y los míos.
Un pájaro del cielo ha trocado su luz en nuestros ojos.

世界たち

わたしの家は大きな船。
航海に出ようとしないう大きな船。
そのマスト、そのロープは
根となり
海中に植わるクラゲとなった。
この期におよんでわたしは名を言えるだろうか。
太陽が、もしくは
はぎ取られたガレオン船の、悪臭放つ金が見おろす
その海の名を。

わたしの家は大きな船。
夜に守られる大きな船。
その白波でできた軽いワインが欲しい。
その珊瑚礁でできた強い鉄が欲しい。
最後に、目にこぼれる
ゆるやかな原初の草原が欲しい。
ああ、死に至る過去から盗み見る目。

わたしの家は大きな船。
新しい海に囲まれた大きな船。
その海に、わたしは
携えてきた両手と瞳を突き刺す。
甲板の魚に交じって
踊る、漕ぐ、泣く、歩く。
わたしが愛する古い世界
わたしが愛する新しい世界
世界たち、二つの世界たち、わたしの世界たち——
おお、神聖な亀よ

MUNDOS

Mi casa es un gran barco
que no desea emprender su travesía.
Sus mástiles, sus jarcias,
se tornaron raíces
y medusas plantadas en medio de la mar;
a estas alturas,
¿podré nombrar el mar
roteado por el sol
o por el oro fétido del galeón desollado?

Mi casa es un gran barco
que resguarda la noche.
Quiero los vinos leves de su espuma.
Quiero los hierros fuertes de sus corrales.
Quiero, al fin, la lenta y prístina llanura
derramada en los ojos.
Oh los ojos furtivos del pasado mortal.

Mi casa es un gran barco
rodeado de aguas nuevas
donde clavo mis manos
y las pupilas que he traído.
Bailar, bogar, llorar y andar
entre los peces de cubierta.
Viejo mundo el que amo,
nuevo mundo el que amo,
mundos, mundos los dos, mis mundos:
Oh las tortugas sacras;

ああ、海藻よ

ああ、ひとつの世界の中心に錨をおろした
海辺の女の名よ。

帆柱の先端で彫られた傾斜にわたしは住んでいる。

「歩こう」

愛情に満ちた息でかつてあの奴隷は言った。

無傷の木の幹のように、ゆるぎない巣のように

二人は脚を植えた

嵐のなか抱き合いながら。

「磨かれた石の時を考えてごらん。

それはいつもここに到着し、

弓を射り、そして再び起源を射る」

彼はまたわたしに言った。

そしてもう彼の魂は孤立していなかった

そしてもう彼の口は燃える島になっていた

果実や言語や波や羊皮紙にあふれた島に。

わたしの家は大きな船。

悪魔がほとんどいない大きな船。

なぜならわたしが追い払ったから

なぜならわたしは至上の法則として幸福を望むから

至上の法則としてわたしはバイオリンを望む

揺れ動く無傷のコントラダンサ。

わたしの家は大きな船。

そしてわたしの右に、静脈で

小さな島々の、見たことのない世界地図を描く。

わたしは船の家に住んでいる

(わたしを庇う、なんと力強い船)。

ay, las algas;
ah el nombre de la mujer costeña,
anclada en el centro de un mundo.

Vivo en el sesgo tallado de la espiga.

“Vamos a andar,” me dijo alguna vez,
con su aliento amoroso, aquel esclavo.
Y ambos sembramos nuestras piernas
como troncos incólumes, como nidos fundados;
abrazándonos bajo la tempestad.
“Piensa en el tiempo de la piedra pulida
que siempre llega aquí
para lanzar el arco y otra vez el origen,”
volvió a decirme
y ya su alma dejaba de estar sola,
y ya su boca misma era una isla ardorosa,
harta de frutas, lenguas, olas y pergaminos.

Mi casa es un gran barco
sin demonios apenas
porque los conminé a la retirada;
porque quiero la dicha como regla suprema;
como regla suprema quiero el violín,
la contradanza ilesa en su vaivén.

Mi casa es un gran barco
y trazo con mis venas el mapamundi nunca visto
de los islotes a mi diestra.
Vivo en mi casa que es un barco
(qué poderoso barco me cobija).

わたしは船の家に住んでいる
(わたしを蘇らせる、なんと力強い白波)。
嵐と稲妻から守られながら
わたしは生きている船で生きている。
わたしは言おう
わたしの家は大きな船
金色の島に浮かぶ大きな船
わたしはここで死んでゆく。

「黒人の女」

Vivo en mi casa que es un barco
(qué poderosa espuma me refresca).

Vivo en mi barco vivo
amparada del trueno y la centella.

Mi casa es un gran barco

digo

sobre la isla dorada

en que voy a morir.

〈訳註〉

「わたしはご主人さまを愛している」

- ビウエラ 16世紀のスペインでよく使われていた、ギターに似た弦楽器。
- マンリケ 15世紀のスペインの詩人ホルヘ・マンリケ (Jorge Manrique) のこと。代表作は『父の死に寄せる詩 (Coplas por la muerte de su padre)』(佐竹謙一翻訳, 岩波文庫, 2011年)。
- マリンプラ 共鳴体となる木の箱に複数の金属片をつけ、それを弾くことで演奏するアフリカ起源の楽器。

「黒人の女」

- マンディングガ ブルキナファソやコートジボワールなど西アフリカの国々に居住する、マンデ語族の1つで、マンディンカ族、マリンケ族などともよばれる。奴隷制時代に多くのマンディングガがキューバに連れてこられた。
- マセオ キューバ独立軍の将軍アントニオ・マセオ (Antonio Maceo 1845-96) のこと。ムラート (混血) の勇敢な戦士だったことから「青銅のタイタン」と呼ばれる。
- シエラ シエラ (sierra) とはスペイン語で「山脈」のことだが、ここでは、フィデル・カストロが率いるキューバ革命軍がゲリラ戦の拠点としたマエストラ山脈をさしている。

「ペルソナ」

- 十一音節詩 ダンテの『神曲』をはじめ、イタリアの古典詩で多く使われた詩形。16世紀にトレド出身の詩人ガルシラソ・デ・ラ・ベガ (Garcilaso de la Vega) によってスペイン語の詩にも導入された。

- 「アントニオの女」 ミゲル・マタモロス (Miguel Matamoros 1894-1971) が作曲した、ソンと呼ばれるジャンルの曲のタイトル。ソンは20世紀初頭にキューバで流行した。使用する楽器、リズム、メロディーなどにおいてスペイン系とアフリカ系の要素が融合しているため、キューバの混血文化を象徴する音楽とされている。マタモロスはソンの人気に大きく貢献した音楽家。キューバの国民的詩人ニコラス・ギジェン (Nicolás Guillén 1902-89) は、この曲に着想を得て詩「アントニオの女の誘拐

「黒人の女」

(*Secuestro de la mujer de Antonio*)」を書いている。この詩で「アントニオの女」はムラータ（混血の女性）として描かれている。

「向かいのお嬢さん」 先述の「アントニオの女」の歌詞に登場する表現。

「お袋——黒人女のパウラ・バルデス——」 ギジェンの詩「トレスをもつキリーノ (Quirino con su tres)」に登場する一節。トレスはソンの演奏に使われる、キューバ特有の弦楽器。

「暁に彷徨う女」 キューバの詩人・前衛美術家ファヤド・ハミス (Fayad Jamís 1930-88) がギジェンに捧げた詩「暁に彷徨う人 (Vagabundo del alba)」を女性形 (vagabunda) にして引用している。

キンタ・デ・ロス・モリーノス ハバナ市にある文化遺産。「水車の別荘」の意味。18～19世紀に、タバコ葉をくたくたのための水車があったことからこう呼ばれる。植民地総督の別荘として利用された。

「世界たち」

コントラダンサ 17～18世紀にフランス宮廷で流行したコントルダンスが起源といわれる。19世紀のキューバでアフリカ由来のリズムと融合していった結果、キューバ独自の音楽ジャンルとなった。コントラダンサが発展してハバネラが生まれた。

* 翻訳にあたっては、モレホン本人が編集・改訂に携わった西英対訳版である *Looking Within / Mirar adentro: Selected Poems / Poemas escogidos, 1954-2000* を底本とし、必要に応じて初出を参照した。

〈参考文献〉

Cordones-Cook, Juanamaría

1996 “Voz y poesía de Nancy Morejón,” *Afro-Hispanic Review*, Vol. 15, No.1, pp.60-71.

Morejón, Nancy

1996 “Las poéticas de Nancy Morejón,” *Afro-Hispanic Review*, Vol. 15, No.1, pp.6-9.

2002 “Palabras por el Premio Nacional de Literatura,” AfroCubaweb.

<<http://www.afrocubaweb.com/nancymorejon.htm>> 2016年9月28日閲覧

2003 *Looking Within / Mirar adentro: Selected Poems / Poemas escogidos, 1954-2000*, Detroit: Wayne State University Press.